

# 緑の里山汗流す



ボランティア最前線

里山グループ

野や山が一番生き生きするのは「初夏の今でしょ」。

KSCを取り巻く里山を一度探索してはいかがでしょう。色とりどりの花々が出迎えてくれます。

この魅力にはまったKSC4期、6期のOB8人が平成12年、里山グループを立ち上げ、環境部会に初名乗りをあげました。生環コースで講師も勤めた谷口博先生がリーダーでした。

7、8、9期OBも相次いで入部。カレッジ北側の鬱蒼とした山の下草を刈り、生い茂る樹木を伐採して間引き。花の咲く木や草を育て、癒しの場となる里山作りをめざしたのです。常緑小木から伐採を始めました。2、3年もすると日当たりや風通しがよくなり、植えた覚えのない草花が次々と芽をだし、花を咲かせます。今は、紫式部、笹百合、吾亦紅など草花の宝石箱となっています。

これまでにシイタケ栽培用にコナラ200本を切り倒しました。これを乾燥させてほだ木を作ります。ほだ木にシイタケ菌を植え付けると、1本で数十個が3年間は収穫できます。

里山グループは、子ども対象の環境教育にも力を入れてきました。「自然を大切に」の心は、小さな子どものときからの自然との触れ合い体験が大きくものを言うからです。KSCや環境未来館での「夏休みお助け隊」で木や実の工作、ツタなどでリースを

作り、「春を食べる」で子どもたちと山菜などのてんぷら試食会なども開催。生環コースの授業、花実の森プロジェクトにも協力しています。

今年度は立ち上げ当初からのメンバーの松本義彦さん(生環6期、75歳)を再度会長に、元気な18期生7人を迎え、44人で里山の維持、再生を続けています。

× × × ×

6月3日、午前9時30分から11時までの例会(毎月、第一火曜日と第三金曜日)を取材しました。参加者は15人。草刈り機を使って山裾のササを刈りました。



カマを使う人もいます。1時間足らずで、さっぱりしました=写真上。

杭を何本も打ち、周囲にロープを張っています。「花は野にありてこそ」を分からぬ無粋な花盗人が居るらしく、珍しい草花が、盗まれないようにするためです。

山に入るとシジュウカラ、ヤマガラが子育て中で、12羽のひなにエサを運んでいる夫婦も。会員がキイチゴを摘んで「食べてみて」と渡してくれました。口に含むとよい香りがし、瑞々しくてとても甘い=写真中。

お茶を飲みながら、何が楽しいかを聞きました。「四季折々の花が見れる。緑が一杯で、空気もいい。いい人ばかりでともに汗を流すのが心地よい」と口々に話してくださいました。

悩みの種は、会員の高齢化。「私たちが苦勞に苦勞を重ねて手に入れた知恵、技術、経験をぜひ、次世代の人に伝えたい。入会をお待ちします」と力を

込めていました。

(取材・写真＝広報 徳原 尚世、永野 知己)